

# 『文章表現』の指導

——上1クラスの場合——

藤井美佐子

## I. はじめに

1993年度春学期、上1クラスの『文章表現』を担当した。その指導方法と授業内容を報告する。

留学生は大学生活を送る中で、日本語でレポート・論文・手紙等を書く必要に迫られる。論文・レポートであれば正しい文を書く必要があることはもちろんだが、しっかりした構成で論理的な文が書ける力が必要だし、手紙の場合は正しい待遇表現が使えなければならない。またそれぞれの文章に合った語彙・文のスタイルを選ぶことも大切である。上級クラスに求められる課題は3か月では消化できないほど多岐にわたっている。そこでこの上1クラスの場合、学習目標を次の3点に絞ることにした。

- ① 文法的に正しい文が書けること
- ② 5,6百字程度の長さで自分の意見が書けること
- ③ 文章語に適した語彙を習得すること(これは主として別に設けた漢字学習の時間——週1コマ——に譲った)

授業時間数は週2コマで、授業の具体的な進め方は後に記すが、教材文を基にタスクをし、感想・意見を書くことを中心とした。しかし書くことに専念するのではなく、その時間に取り上げた文のテーマについて互いに意見を交換したり、学生の文の誤りを一緒に正したりもした。

学生は6名で、アメリカ3名 カナダ1名 ドイツ1名 ブラジル1名である。春学期終了後は、アメリカ人3名は日本の外資系企業で6か月研

修を受け、他の3名はそれぞれ自国の大学に復学するということがあった。

## II. 授業内容

授業内容は次の3つに分けられる。

(1) 既習文法の整理 (2) 教材文を基にした実践学習 (3) 作文  
以下順次紹介していくこととする。

### (1) 既習文法の整理

① 練習問題 (イ) 助詞——主として『は・が』——

(ロ) 接続語 (ハ) 指示詞

(ニ) 自動詞・他動詞

② 文章中の誤りを直す

この作業は次の(2)と並行して行い、全体として数コマを当てた。①はこれだけの練習で文法的誤りをなくすことは望めないが、特に間違いやすいもの、身についていないと思われるものを取り上げた。②は文中の文法・語彙の誤りや日本語らしくない表現を正す練習である。長さは200字前後で辞書を使わずに理解できる文章を選んだ。このような練習をさせたのは文章を客観的に見ることによって、自らが作文するときに資することができるのではないかと考えたからである。

### (2) 教材文を基にした実践学習

この学習方法は、基になる教材文に則していくつかの学習項目をたて、『文を書く』練習をするというものである。前の週に教材とする文章を渡し予め下読みしておくように指示する。読解が目的ではないので、あまり難しくなく長さも1000字前後の文章を選び、教師が1度範読して辞書を引くときの助けとした。次週、教材文に則してタスクをし、或いは意見・感想文を書くというやり方をとった。教材文が短く簡単な場合は1コマ、通常は2コマを当て、時間内に終わらせるようにした。(意見・感想文を詳しく書きたいと希望した場合には次回までの宿題とした)

【タスク例】 若者意識

I. 文を完成させなさい。

1. この調査の名称は\_\_\_\_\_。
2. この調査は\_\_\_\_\_から\_\_\_\_\_，今回は4\_\_\_\_\_。
3. 日本の若者は社会に対し\_\_\_\_\_，不満の理由として\_\_\_\_\_をあげている。不満なときには\_\_\_\_\_と言っている。これに対し，韓国，スウェーデン，米国，オーストラリアは\_\_\_\_\_。
4. 日本の若者の自己犠牲の考えは\_\_\_\_\_。
5. 成功の要因については，日本と他の国とでは「 」と「 」は\_\_\_\_\_が，「 」をあげた割合は\_\_\_\_\_。
6. 生きがいについては\_\_\_\_\_。
7. 転職希望者は，日本は\_\_\_\_\_，各国中\_\_\_\_\_。

II. ( )の中の言葉の形を変えたり，助詞などを加えたりして，文を完成させなさい。\_\_\_\_\_だけのところは，適当な言葉を考えて書きなさい。

1. 日本の若者の社会に対する不満は，各国と(比べる)\_\_\_\_\_決して(低い)\_\_\_\_\_，改善しようとする積極性はない。
2. 外国の青年と(比較する)\_\_\_\_\_，日本の青年の考え方を知る\_\_\_\_\_この調査を実施している。
3. 「貧富の差がありすぎる」は，欧米では50%を(越える)日本では29%\_\_\_\_\_。
4. 家柄重視に対する\_\_\_\_\_は韓国では\_\_\_\_\_。
5. 「自分自身の利益を犠牲にしてもよい」と考えている\_\_\_\_\_は13%\_\_\_\_\_目立って低い。
6. 若者たちに，社会で成功する\_\_\_\_\_必要なものを複数回答で(聞く)\_\_\_\_\_「個人の努力」が一番多かった。
7. 「今の職場でずっと続けたい」と答えた日本人は26%\_\_\_\_\_，転職希望者が(比較)\_\_\_\_\_多い\_\_\_\_\_。

取り上げた学習項目は，(a)文末表現練習 (b)要旨をまとめる (c)簡条書き (d)文章中の数字を表にまとめる (e)文章の内容に則してタスクの文を完成させる (f)質問に答える (g)意見・感想などを書くなどである。この7項目のうち，教材とした内容，性質により適当なもの2~4項目程度を取り上げた。なお，教材文中の必要な表現文型を，時間の終わりに説明し，時間的余裕があるときは使い方の練習をしてその教材文の学習のまとめとした。

扱った教材と学習項目は次の通りである。

教材文	学 習 項 目	
イースターエッグ (日本経済新聞)	段落・構成を考える タイトルを考える	イースターの思い出を書く
ゴールデンウィーク (朝日・読売・日経)	数字を読み、表にまとめる 3紙の記事を読み比べ新聞の 表現について考える	ゴールデンウィークの過 ごし方について
魚 (総合日本語中級)	質問に答える ※	
新オフィス考 ☆	教材文の意見を表にまとめる 箇条書きにする 文末表現を考える ※	
男女平等 ☆	段落を考える ※	自己の体験・意見等を書く
もったいない ☆	※	意見・体験を書く
若者意識 ☆	内容を箇条書きにする ※	意見を書く
スローガンだけの福 祉でなく ☆	質問に答える ※	自国の福祉の状況を書く
国際化とボランティア ☆	質問に答える ※	意見・自国の状況を書く
学校教育 (読売新聞)	質問に答える ※	自国の学校教育の問題点 について書く
芝生を見て思う (服部四郎)	質問に答える	感想・意見を書く

☆ 『朝日新聞で日本を読む』

※ 教材文の内容に則して書き直した文を完成する問題

### (3) 作文

『表現』は口頭表現であれ文章表現であれ、表現主体即ちここでは学習者が「表現しよう」とする内容があり動機がある。(2)のような学習はともすれば教師にコントロールされているという気持ちを学習者に与えかね

ない。学習者自らの意思・感情の表出の場として『作文』を取り上げた。作文は宿題の形で3回、800~1200字程度のものを書かせた。1・2回は課題作文、3回は自由作文とした。(2)の学習の中で行った意見・経験などを書く練習と異なる点は、(2)では短時間で短く考えをまとめることの練習であったのに対し、『作文』では、課題あるいは自己の選んだ主題にそって構成を考え、語彙を選び、漢字を確認して文章をまとめることをねらいとした点である。題目は、1回目「私の母」2回目「東京の生活」3回目「自由題」とした。自由題ではそれぞれ次のような題(内容)を選んだ。(a)現代の日本の役割(PKOの問題を考える)(b)サラリーマンのつらい生活(通勤地獄・残業など)(c)軍隊の経験(2年間の軍隊生活)(d)ある夏休み(教会に通い始めた経験)(e)夢(夢の中で日本のアイドル歌手に英語を教える)(f)日本の会社(7月から研修予定の会社の紹介)

### III. 結果と問題点

以上(1)~(3)の中、(2)と(3)について気づいたことを記そう。

#### (2) 教材文を基にした実践学習について

全部で11の文章を基本文として扱った。練習項目7つの中、(e)文を完成させる8回、(f)質問に答える5回、(g)意見・感想などを書く7回などで、(a)(b)(c)(d)はそれぞれ1~3回程度練習するにとどまった。

まず教材とした文章の下読みをしておくことが条件であったが、始めの1,2回を除いてほとんど守れず、教室で辞書を引きながら読むという状態で、時間がかかったり内容が十分に把握しきれなかったこともままあった。日本語らしい言い回しや文末表現に馴れるようにという目的で、教材文を使って練習させたのであるが、上記の点では一考を要する結果となった。

(a) 回を重ねるにつれて適切な文末表現がとれるようになっていった。

(b)(c) 内容を十分理解した上で、自分の文に構築し直さなければならぬのでかなりの日本語力を要し、ともすれば文章中の言葉の引き写しになりがちであった。

(e) 内容の把握と同時に、与えられた文に合わせて言葉や表現を選ばなければならないという制約があって、問題文によっては難しかったようである。

(f) 『表現力をつける』ことが目的であるから、原文の意味を咀嚼し自らの言葉で表現するような質問を心掛けたつもりであるが、原文を引き写して、質問と合わない解答形式になることもままあった。

(g) 教材文のテーマに関連して自己の経験、自国の状況、意見などを30分程度で書かせた。時間が短かったため、知っている範囲の語彙や漢字を使って考えをまとめるにとどまり、構成を考えるまでには至らなかった。前週に教材文を下読みすると共に、そのテーマに添って意見をまとめておくように指示すべきであったかと思う。

(a)～(f)は作業が終わった後個々に添削し、共通の誤りや問題点はなるべくその授業時間内に一緒に考えたり説明したりした。(g)は添削して次週に返却するという方法をとった。全体に参考になるような間違いや、討論させたい問題などがある場合は、必要な部分、あるいは全文をワープロで打ちコピーしたものを渡して、皆で検討したり意見を出し合ったりするようにした。(自国の学校教育の問題点について書かせたところ、アメリカ人3名皆高等学校での drugs の影響を取り上げていたのが印象的であった)

### (3) 作文について

『作文』は毎週の練習で習得した表現やまとめ方などを反映させてひとつのテーマで文章を書く力をつけることを目的としたものであった。初めは5回を予定していたが、結果は3回にとどまった。1・2回目はテーマがごく身近なものであったから書きやすかったらしいが、反面中心のない、時の流れに添って事柄を叙述しただけのものになってしまった。3回めは提出締切3週間前に予告して、関心のある社会的問題からテーマを見つけるように指示したのであるが、個人的経験をテーマとしたのも3編、フィクション1編、日本の政治問題 (PKO) 1編、社会問題(日本のサラリー

マン) 1編であった。

添削は文法の誤りを直すほか、書き手に表現意図を訊ねてその気持ちを大切にしつつ日本語らしい表現にするよう心掛けた。この場合2,3通りの表現を書き添えることもした。宿題としたので全般に漢字の誤りは少なく、語彙を辞書で調べて使おうとする傾向も見られた。文法の面から言えば、受け身文の誤り(助詞の誤用・受け身文の多用)や自動詞・他動詞の誤りなどが目についた。これらは学期初めにまとめて練習はしたものの、練習だけでは不十分で実践して身につけていくべき問題であろう。また論理的に構成しようという意図が働いてか、接続詞が不必要なところに使われたり、誤用されたりしているのが目についた。最後の時間に自由題の作文をそれぞれが発表し、感想や意見交換をして『文章表現』の授業のまとめとした。

以上で春学期に上1クラスで行った『文章表現』の授業の紹介を終わる。学習者が表現したいことを、その内容に相応しい形で書き表すにはどうしたらよいか、最も効果的な学習方法はどうすればよいかなど、模索しながらの3か月の授業であった。6名という少人数だったので、書き手の意図を確かめながら添削することができたのは幸いであった。この貴重な経験を基に今後より良い方法を考えていきたいと思っている。